

2023年12月発行

CWS JAPAN NEWSLETTER NO. 87

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、
ご理解をいただき、ありがとうございます

ララ（LARA）の レガシーを受け継いで

11月30日はララの記念日。今号では、7年前の2016年11月30日、CWSのルーツであるララの70周年記念フォーラム開催当時に記憶を巻き戻してみます。

ララ70周年記念フォーラム

ララとは何か？それは、敗戦後、飢餓と貧困で苦しんでいた多くの日本人を救い、日本の学校給食を再開するきっかけとなった「ララ物資」のことです。

ララ物資はケア物資（アメリカのCAREという民間団体から1948年～55年までに贈られた救援物資）と並び、1946年～52年まで北アメリカのクリスチャンによって集められ、日本に贈られた支援物資でした。1946年11月30日、サンフランシスコからララ物資を満載した第1船が横浜港に到着しました。

ララ救援活動とともにアメリカ（ニューヨーク）で設立されたCWSは2016年に設立70周年を迎え、その日本事務所であるCWS Japanは西早稲田のスコットホールで記念フォーラムを開催し、ララにゆかりのある個人・団体など多くの来場者をお迎えしてお祝いすることができました。

2016年に開催されたララ70周年記念フォーラムの
当時のポスター©CWS Japan

BIG ANNOUNCEMENT!
CWS JAPANへのご寄付
は税控除の対象です。

[継続的に寄付をする](#)

[一度ずつ寄付をする](#)

[モノで寄付をする](#)



ララ70周年記念フォーラム

今伝えたいララからのメッセージ

2016年
11月30日(水)
13:30～18:00 定員100名(100)

会場：スコットホール講堂
スコットホールギャラリー
(早稲田キャンパス内)

参加費無料(定員：150名)
共催：CWS Japan (フォーラム事務局)
(協賛) フェリス学院
日本基督教団
(協賛) 日本YMCA同盟
(協賛) 日本YMC同盟
(協賛) 早稲田大学

09時開始) ララ写真展
会場：スコットホールギャラリー
会期：11月30日
12:00～18:00

わたしは、このララ70周年記念行事の運営を任されたことがきっかけとなり、ララとCWSの歴史を紐解く作業から始めました。それは、敗戦国日本では、わずかな史料・画像しか残されていないことが分かり、海を越え、アメリカ・カナダにまで発掘調査に出かける結果となりました。

そこで、同年7月、ちょうどシカゴで開催されたCROP US Summer GatheringというCWSアメリカ本部が主催したファンレイジング・スタッフ会議に参加することになり、会議出席後、カナダ（トロント）に飛び、現在のカナダ合同教会公文書館を訪問しました。

7年前の史料調査

70年という時を経て、ララ物資の恩恵にあずかった世代が減少するとともに、ララの記憶が日本社会から消滅するのは時間の問題になりつつありました。この時の調査結果をCWS Japanのホームページ上で公開して以来、国内外の研究者、メディアからララ関連の問い合わせがCWS Japanに届くようになりました。

なぜ、カナダにはララに関する多くの史料が保管されていたのか？それは、ララ救援活動の中心人物であり、またCWS Japanの初代代表が、カナダ合同教会より戦前から日本に派遣されていたカナダ人宣教師G.E.バット博士だったからです。

では、なぜ、カナダ人であるバット博士がアメリカで設立されたCWS Japanの初代代表となったのか？それは、カナダで行った調査により、バット博士を戦後日本に派遣した組織がCWSアメリカ本部を創設した3団体の一つだったという事実の発見によって明らかになりました。このような歴史的背景を現在のCWSアメリカ本部、博士を派遣したカナダ合同教会本部も彼を送り出したトロントの教会も誰一人として知る人はいませんでした。

2023年フィラデルフィアでの調査

7年前に行った調査では、ララの発足とともにCWSが設立された経緯、ララの中心人物が戦前から日本に派遣されていたカナダ人宣教師G.E.バット博士であり、CWS Japanの初代代表となった経緯を知ることができました。

それらについては、すべて、CWS Japanのホームページ上（ストーリー「ララとCWS」）で紹介しています。

7年前は、アメリカ国内でララ物資がどのようにして集められたのかについては限られた情報しか分かっていませんでした。ただし、アメリカのキリスト教系関係組織からフィラデルフィアにあるPresbyterian Historical Society (PHS)にはCWS発足当初の史料が保管されているという情報だけは確認できていました。しかしながら、その後、フィラデルフィアを訪問する機会はなく、今年5月、7年越しの積み残し課題に、ニューヨークのCWSアメリカ本部に出張した際、ようやく向き合うことができました。

フィラデルフィアにはニューヨークから電車で1時間ほどで移動できます。アメリカ合衆国建国の地であることから、歴史的建造物・施設が多く、修学旅行生のグループが日々訪れる、まるごと世界遺産のような町です。1852年に発足したPHSは町の中心部に建ち、正面玄関にはBLACK LIVES MATTER (BLM) のサインが掲げられ、その堂々とアピールする姿勢に鳥肌が立ちました。



Presbyterian Historical Society正面玄関
©CWS Japan

アーキビストが奥の書庫から出してきたCWS関連の箱の中には、ララ発足に参与したChurch Committee for Relief in Asia（アジア救済教会委員会：CCRA）によってアメリカ国内の加盟教派に向けて終戦直後（1945年9月）に発信された日本とアジア諸国に対する緊急人道支援のアピール文書が含まれていました。



Presbyterian Historical Society
(フィラデルフィア) ©CWS Japan

ララとCROP運動

実は、7年前のララ70周年記念フォーラム開催の直前、「こんなものが見つかったよ。」と1冊の古い冊子『ララ救援物資について』（1951年1月厚生省社会局刊）を日本キリスト教奉仕団の理事長から手渡されました。同奉仕団は、ララ救援活動の後のちに生まれた日本国際キリスト教奉仕団のことであり、偶然にも同じ会館のフロアに現在事務所を置いています。

この冊子には、ララ物資がCROP（Christian Rural Overseas Program）運動によって、アメリカ全土の農村部から集められた農産物であることが書かれていました。そして、5月のPHS訪問は、まさにララとCROP発祥との関係性を再確認する旅となりました。

CROPは1947年、CWSが第二次世界大戦後のヨーロッパやアジアで飢えや貧困で苦しむ人々の緊急人道支援のためにアメリカ全土に向けて寄付を呼びかけた運動として始まり、翌年にはルーテル教会やカトリック教会系支援組織とのパートナーシップによって規模が拡大

されていきました。PHSに保管されていた文書の中には、終戦後、アメリカ各地からどれだけの農産物や支援物資が日本や海外の困窮者のために献さされ、それらの寄付が教派を超え、地域の教会の主導によって集められていたかという記録も見つかりました。

その後、CROP運動は名称もCROP HUNGER WALKに生まれ変わり、アメリカ各地で開催されるウォークラリーイベントのファンドレイジングキャンペーン活動として継承されています。

最後に

ララの価値とは、国益のためでも、政治的取引でもない、全く無条件の民間による本物の人道支援にあると考えています。

ついこの間まで敵国だった国民にすぐに手を差し伸べようとする隣人愛と奉仕の精神には心動かされるものがあり、それゆえに多くの人々から賛同を得て、民間の力で多額の資金と物資調達に成功し、連合軍最高司令官総司令部（GHQ）までその支援活動に協力したほどです。昭和天皇はララ物資の倉庫を訪問し、礼を述べ、横浜港には香淳皇后こうじゅんこうごうがララへの感謝を詠んだ歌碑かひも建てられました。

ララのレガシーとは…何の見返りも期待しない真の人道支援であり、だからこそ、市民の力で成し遂げられるものではないでしょうか。それを受け継げることに喜びを感じています。

今年のクリスマス🎄皆さんは誰を想うでしょうか？

（文：ディレクター 牧 由希子）

アフガニスタン 西部地震被災者 支援報告

安全なテントで生活再建の一步を踏み出した
グルバートさんとその家族（写真：CWSA）

現地時間10月7日午前11時から午後12時半の間に、アフガニスタン西部の中心都市であるヘラートの西方40kmの地点を震源として、マグニチュード6.3を含む強い地震が複数回発生しました。

震源地周辺の被害は甚大でした。ほとんどの家屋が倒壊し、2023年11月29日現在で確認できた犠牲者は1,482人にのぼり、負傷する、住宅を失う、職場を失うなど影響を受けた人の数は約27万5千人になったとされています。

CWS Japanは地震発生直後から現地のパートナー団体である Community World Service Asia (CWSA)と密に連絡を取り合い、深刻な被災地の状況に鑑みて緊急人道支援を開始しました。

冬の寒さが近づく中、 被災者支援は時間との戦い

被災地では、寒冷な冬が近づいていました。冬季(12月～2月)には1日の平均気温が摂氏で1桁台まで下がり、最低気温は氷点下になることもあります。

多くの人々が家を失い、家財も瓦礫の下に埋もれてしまいました。被災した人びとが温かい環境で安全に過ごせるシェルター（仮設住宅）の確保は、生命のリスクを回避するために必須であり、冬の到来を目前にして喫緊の課題となっていました。

そこでCWS JapanはCWSAを通じて、被災した160世帯(約2,100)に対して、冬の寒さにも対応したスカート付きのテントを配布しました。7名の家族でも暮らせる大型のテントで、国連機関も含めた他の支援団体が配布しているものと同様の基準を満たしています。



家を失った多くの家族は、家屋の倒壊と共に多くの家財も失いました。料理をするための調理器具や食器、衣服や防寒具など様々なものを買直しなければなりません。怪我をした人や避難生活で体調を崩した人もいます。

こうした多様なニーズに応えられるようにCWS Japanは、支援した世帯に対して支援金を給付しました。ヘラートはイラン国境にも近く、交易が盛んな街です。幸いにも市場の流通は滞っていないため、支援金を使ってそれぞれの家族が必要とするものを買揃えることができます。

支援を受けた人々の声

地震発生時に外にいたアハメドさんは、家屋の崩壊に巻き込まれませんでした。妻と姉妹を含む全ての家族を地震のために失ってしまいました。

足に障がいのあるアハメドさんは、自ら瓦礫の下から家族を救うことができなかったと語ります。大切な家族を失った悲しみと悔しさはその目から消えていませんが、テントと現金支援に謝意を表し、生きていく希望が少しだけ見えてきたと話してくれました。



支援を受領する際の引換券をもつアハメドさん
(写真：CWSA)

グルザールさんと妻と3人の子どもは、瓦礫から逃れ助かりましたが、1人の子どもが犠牲になってしまいました。

家も家財も失い、差し迫る冬の訪れを前に、不安が募るばかりでした。しかしテントを受け取り安心した笑顔を見せてくれました。受け取った現金で、食料や衣服、暖房のための燃料を購入し、ケガした子どもの医療費にも充てられると嬉しそうに語ってくれました。



テントを受け取り笑顔を見せるグルザールさん
(写真：CWSA)

今後とも迅速かつ柔軟な支援を 継続していきます

家族を失うなど災害による深い悲しみを、すぐに癒すことは難しいかもしれません。しかし暖かく安全な家や食料など、目の前の不安を少しでも取り除き、1日も早く人びとが希望に向かって再び歩み出せるように、CWS Japan はこれからも迅速かつ柔軟な支援を届けてまいります。

なお、この支援はジャパン・プラットフォームによる助成金と皆様からの温かいご支援によって可能になっています。引き続きの応援をどうぞよろしくお願いいたします。

(文：プログラム・マネージャー五十嵐豪)

年次報告書はお手元に 届きましたか？

CWS Japanとして初めて年次報告書を発行しました。

これまでご寄付いただいた皆さまには、郵送でお送りしておりますが、お手元には届いていでしょうか？登録住所の変更などは public@cwsjapan.jp までご連絡いただければと思います。

なお、年次報告書はオンラインでもご覧いただけます。ぜひご自身にあった方法で、お時間のある時にお読みいただけますと大変励みになります。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

2022年度 年次報告書を読む

認定NPO法人
CWS JAPAN
2022年度 年次報告書

守れる命を守るために

2022
ANNUAL REPORT
【2022年7月1日～2023年6月30日】

国際交流カフェ開催！ ー国際ボランティア・デーに沿って

10月18日(水)に、コミュニティ・カフェ@大久保で『国際交流カフェ』を企画・開催しました。

今回の記事では、国際ボランティア・デーにちなんで、この国際交流カフェをはじめ、日頃からボランティアに関わっている学生メンバーの活動を紹介するとともに、ボランティア活動に参加してよかったと思うことや得られたこともお伝えしようと思います🔊



国際交流カフェのチラシ ©CWS Japan

イベント概要

当日の国際交流カフェでは、日本語のレベルや出身地に関係なく、新しい友達作りや異文化交流の機会づくりを目指しました。

初めての開催のこの日の参加者は、大久保地域の日本語学校の学生さんたちメインに、早稲田大学などから日本人学生も来てくれました。交流の前半では、緊張をほぐすために簡単なゲームをしながら、それぞれ自己紹介し、後半はオセロやトランプなどのゲームをしながら、楽しくおしゃべりしました。

学生メンバーから

学生メンバーに以下の点について、感想やメッセージをもらいました！

- (1)国際交流カフェの感想
- (2)コミュニティ・カフェ@大久保でボランティア活動に参加してよかったこと
- (3)ボランティア活動への参加にハードルが高いと思われる方にアドバイス

細原 千聖（早稲田大学教育学部4年）

(1)他愛のない話やゲームをきっかけに、一人ひとりの顔と名前を知り、性格などを想像できたことが良かったです。このような交流が、お互いを知り、親しみを持つスタート地点だと感じました。

(2)参加者の留学生の方が、「日本にいても、日本人の友人がほとんどいない」という意見が印象に残っています。わたし自身について考えても、大学で知り合う以外の外国人の友人はほとんどいません。多様性の時代と言いつつも、同じような境遇の人としか普段のコミュニケーションがなかったことに気づかされ、内省しました。

(3)「ボランティア」という名前ではなく、自分自身の「これを学んでみたい」「こんな活動をしている人とつながってみたい」「この街はどんな街なんだろう」といったちょっとした興味から足を運んで関わってみると、思いもよらない発見や学びを得られると思います。

コミュニティ・カフェ@大久保がオープン！

こんにちは👋広報のニシザワです👋突然ですが、新宿区大久保にカフェを開きました👏そして、多様な背景を持つ人々が住むこの地域において、憩いの場になるようにとの想いをこめ、デザイナーさんにロゴを制作していただ...

♡7

CWSJapan
2023/04/07 07:52

note

コミュニティ・カフェ@大久保については
上記をクリック



田中 千尋（早稲田大学文化構想学部3年）

(2)自分たちでカフェでのイベントを企画し開催することで、来てくださった方に癒しや楽しさを提供できていると感じられる瞬間が嬉しく感じます。多様なバックグラウンドを持つ方が集まり、交流する輪にボランティアとして携われる機会がありがたいと感じています。

(3)ボランティア活動には取り組みやすいものもたくさんあって、何かスキルや経験がなくても思いがあれば誰でも参加できます。わたし自身、参加する前は不安と緊張がありましたが、参加して良かったと思うことばかりです。ぜひ気軽にボランティアに関わってみてください！

鐘 采禎（立教大学キリスト教学研究科前期）

(1)地域の学生との交流機会があまりなくて、今回はみんなとボードゲームをしながら色々な話をしました。素晴らしい経験だと思って、次の交流カフェを楽しみしています。

(2)イベントの参加者ではなく、コミュニティ・カフェの運営に関わって、カフェがどんな感じで活動しているかを知って、いろんなイベントの準備と参加の両方できることが一番良かったです。ここで地域の住民との交流が多くなって、大久保のことを知ることができて、もっと勉強になりました。

(3)最初はイベントの参加者でも良いです！わたしはボランティア活動に2回参加して、その後に学生メンバーになりました。気軽に参加してください！



留学生が持ってきた母国のゲームやカードゲームをする様子 ©CWS Japan



留学生と日本人学生が混ざって一つのテーブルを囲む ©CWS Japan

長沢 真歩（早稲田大学文化構想学部3年）

(1)「共通点探しゲーム」では、どこにでもあったと思っていた風習が実は他の文化にはないものだったと気がついたり(ペットを飼うなど)、UNOはベトナムやモンゴルではあまり一般的ではないということに少し驚いたり、色々発見がありました。皆さん、とても楽しんでくれたようで嬉しかったですし、わたしも最初は緊張していましたが、フレンドリーな学生さんたちのおかげで本当に良い時間を過ごすことができました。

(2)わたしにとってコミュニティ・カフェ@大久保という場は「癒し」です。年齢、バックグラウンド、属性などに関わらず、人々がお互いにリスペクトした上で、対等に関わることのできる場は実はあまりないのではと思います。忙しく複雑な人間関係で疲れてしまいがちな日常生活から解放され、純粹に楽しめる時間をこの活動で持てていることを嬉しく思っています。

(3)必ずしも場を上手く回したり、大きな役を担おうと思わなくても、気負わずにチャレンジできるところがボランティア活動の良いところだと思います。相手も楽しく、自分自身も楽しむことが一番重要で、お互いにとってプラスになる活動ができていれば十分なんじゃないかとわたしは思っています。一緒に働く仲間や、一步先を歩く職員やアクティビストの方々、そして参加者の方々との出会いからは必ず得られるものがあるはずです。

三国 萌恵（早稲田大学国際教養学部4年）

(1)今回の交流会では、参加者の日本語のレベルに問わず、楽しんでほしいという思いから、ゲーム要素を多く取り入れた交流会にしました。わたしは、主催者側として全体を見ていたのですが、どのテーブルもゲーム、特にUNOで盛り上がっていて楽しい会になったのではないかと思います。参加者同士でお互いにバックグラウンドを紹介し合うような場面も多々あり、国際交流という点でも参加者・学生メンバーの双方向に良い体験になったと思います。今後もこのような輪を拡げていきたいです。

(2)学生メンバーの興味関心が様々なところがあり、ちょっとした隙間時間にする雑談で自分の世界が広がる場所です。イベントに来てくださる講師の方や参加者の方々との交流はもちろんですが、学生メンバー同士で色々な話を聞くなかでだけでも、新たな視点や価値観を学ぶことが多々あり、実りのあるボランティア活動だと実感しています。

(3)わたしたちの活動のメインは、月2回、カフェ営業とその日のイベントのお手伝いです。それも毎回参加必須というわけではなく、自分のペースで参加できるので、忙しい学生の皆さんにも挑戦しやすいボランティアではないかと思います。それでいて、他の学生メンバーやカフェを通して出会う人々との交流は濃密で、大学内ではなかなか会うことのできない人々と出会える貴重な場にもなっています。興味があれば、ぜひ気軽にお声がけください！お待ちしております！

(文：インターン 三国萌恵)



国際交流カフェ終了後に
撮影した集合写真
©CWS Japan

組織の説明責任

—HAPIC登壇報告

2023年11月11日、東京都内で開催された社会課題に取り組む団体・企業・個人等が参加する大型イベント『[Happiness Idea Conference](#)（通称：HAPIC /ハピック）』で登壇してきました。

『支援』という力を持つ者の責任

わたしが登壇したのは「支援者の説明責任」をテーマにした分科会で、国際協力NGOセンター（JANIC）の3つのワーキンググループ「ジェンダー平等推進」、「子どもと若者のセーフガーディング」、「性的搾取・虐待・ハラメントからの保護」合同で企画しました。

3つのワーキンググループは、それぞれの専門分野の視点から、支援現場における多様性の尊重し、より脆弱な立場にある人びとの保護の重要性を啓発し、こうした視点を支援の実践に反映されるよう取り組んでいます。

これらワーキンググループが取り組んでいる共通の課題として、支援者とその支援の受け手（裨益者）の力（立場）の差から生じる不適切な行為（搾取や不正など）をどのように予防し、残念ながらこうした事案が発生した際はこれを迅速に把握し、被害を受けた人に対して必要とされる保護と支援を提供できるかということがあります。

▼登壇した分科会の概要は[こちら](#)

▼JANICのワーキンググループの解説は[こちら](#)

説明責任を果たすべき相手は、支援者だけではない

「説明責任」というと、支援活動を支えてくれる寄付者や助成金を拠出していただいたドナーへの説明というイメージがありますが、支援の現場においては支援の受け手（裨益者）や支援活動の影響を受けるその地域（コミュニティ）に対する説明責任が重要視されます。

支援者の判断、行為または不行為は支援活動の内容に影響を及ぼします。災害や人道危機により脆弱な立場にある人びとは、支援の有無や多少により、その生命や生活の安全性が大きく変わってきます。支援現場において、支援者は支援という「力」を持っているため、搾取や不正が生じ易くなってしまいます。

だからこそ、支援者は「力」を持った強い立場にあるということを知覚して、この「力」をどのように適切に使うかということ、支援の対象者（コミュニティ）に対して説明する責任があります。

組織の責任として

支援者による搾取や不正は、支援者と支援の受け手との間での認識の不一致や誤解、思い込み等により意図的・意識的でない形で生じる場合も多くあります。支援を受ける人の中には、支援者の「力」に対する恐れや不安、または支援の感謝からくる遠慮から、支援者に対して意見を言うことをためらう人も多くいます。それを支援者は一方的に受け入れられている（同意している）と思い込んでしまい、結果として支援の受け手が断れない要求をしてしまうことがあります。

こうした事態にならないように、支援者一人ひとりの倫理性が問われるのは当然ですが、こうした不適切な行為が支援活動による「力の差」から生じる構造的な課題である限り、個人の責任だけを問うだけでは不十分です。支援を実施する組織自体が、職員やボランティアを適切に管理・教育し、弱い立場にある支援を受ける人びとに負の影響が生じないように担保する責任があります。

CWS Japanは支援活動に加え、支援活動を実施する団体としての責任を果たす「より良い」支援の実施を目指して、自団体および他の支援団体と連携した取り組みをこれからも積極的に進めています。

（文：プログラム・マネージャー五十嵐豪）

緊急募金

生活困窮する在日外国人のため
お献げ下さい！

CWS Japanでは、2020年より在留資格や健康問題によって就労できず生活困窮する難民・移民の人々への支援に取り組みはじめ、外国人相談会の開催、病院・入管同行やさまざまな経済的支援を行ってきました。

なかでも、今年6月に可決された入管法改悪によって、帰国できない事情を抱える非正規滞在者は先の見えない自分たちの将来を悲観し、不安な日々を送っています。

このような難民・移民への人道支援、また彼らと日本人との出会いや交流拠点として、CWS Japanは2023年4月にコミュニティ・カフェ@大久保をオープンしました。

緊急人道支援に必要な資金

献金目標金額：**350万円**

献金受付期間：2023年12月～2024年3月

▼本支援への献金はこちらへ▼

ゆうちょ銀行

ゆうちょ振替：00160-7-486854
口座名義：特定非営利活動法人 CWS Japan
トクヒ シーダブリエス ジャパン

銀行口座

三菱UFJ銀行 神田支店 (店番331)
普通預金口座 0333767
口座名義：特定非営利活動法人CWS Japan
トクヒ シーダブリエス ジャパン

CWS Japanとは

米国に本部を置く Church World Service (CWS) の歴史は、敗戦直後の日本へ贈られた食糧物資の配布活動から始まりました。2011年、東日本大震災に対する緊急支援を行うため、再びCWS Japanが設立されました。

publicsewsjapan.jp



外国人当事者の声



350万円の使途および実施内容

【内訳】

- ・ 外来医療費補助：30万円
- ・ 手術・入院費補助：50万円
- ・ 住居費補助：150万円
- ・ 在留資格等の法律相談・弁護士費用補助：60万円
- ・ 自主帰国費用補助：30万円
- ・ 人道支援拠点カフェ運営費（外国人相談・日本語学習支援・支援物資配布・各種交流企画の開催）：30万円

仮放免制度とは？

病気その他やむを得ない事情がある場合、一時的に収容を停止し、一定の条件を付して、例外的に身柄の拘束を解く制度のことです。
(出入国在留管理庁ウェブサイトより)



わたしはクリスチャンです。母国ではマイノリティ（少数派）なので、宗教的理由で迫害を受け、来日しました。持病があり入院を繰り返していることから、仕事が続けられず、治療費が払えません。

(40代 男性)

わたしは難病を抱え、来日しました。難民申請しましたが、却下されました。仮放免中に病気の悪化と生活困窮のため、もうあきらめて、自主帰国しようと思いましたが、帰国費用が払えません。

(30代 男性)

わたしは政治的理由による迫害から逃れるため、来日し、難民申請を行いました。仮放免になってしまいました。就労が許されないことから生活困窮し、弁護士費用が払えません。

(20代 男性)

わたしは留学生として来日しましたが、経済的事情で退学せざるを得ませんでした。その後、日本で二人の子どもを出産し、シングルマザーとなりました。子ども達はそれぞれ、難病や障がいを抱えています。生活が大変不安定で、CWS Japanに家賃補助の支援を受けて大変助かりました。

(30代 女性)



過去のニュースレターは [こちら](#)

インタビュー記事は [こちら](#)



紅邑 福子 様 | 一般社団法人 SDGsとらほく 代表理事



上島 安裕 様 | 一般社団法人ピースボート災害支援センター(PBV) 理事/事務局長

2023年も大変お世話になりました。

CWS Japanにとって、新たなチャレンジに取り組んだ1年でもありました。

日ごろからあたたかなご支援ありがとうございました。

2024年もどうぞよろしくお願ひ致します。

Happy Holidays!

特定非営利活動法人CWS Japan
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館25号室

メールアドレス：
public@cwsjapan.jp
電話：
03-6457-6840



[CWSJapan](#)



[@Japan_CWS](#)



[cws_japan](#)